

# カフカ長編三部作とポライトネス

— コミュニケーション行動評価概念 *freundlich* および *höflich* を中心に —

西 嶋 義 憲

## 0 はじめに

フランツ・カフカの作品をポライトネス (politeness) の観点から分析する試みはこれまでほとんどなされていない。ポライトネスとは、コミュニケーションを円滑に進行させるためになされる他のコミュニケーション参与者への配慮行動のことである。本稿は、ポライトネスに関する研究対象の一つであるコミュニケーション行動評価概念 (evaluating concepts of communicative behavior) を利用して、カフカ作品で描かれる登場人物間のコミュニケーション行動のあり方に焦点をあてる。まず、カフカのあるテキスト断片の中で行なわれるコミュニケーション行動への評価行為を分析し、評価概念の使用が日常のかつ一般的であり、いわゆる「カフカの」(kafkaesque) でないことを確認する。つぎに、コミュニケーション行動評価概念の中でも、とりわけ基本的で円滑な協調関係を表示する概念 *freundlich* および *höflich* の使用について長編三部作を調査し、使用の頻度およびその分布から読み取れる登場人物間のコミュニケーション行動のあり方を推定する。そして、その推定結果に基づき、各作品の登場人物によるコミュニケーションのあり方と三作品の内容との関連性を論じる。

## 1 「奇妙な」会話とポライトネス

カフカの作品では、「カフカの」と特徴づけられる非日常的で奇妙な世界

が描かれることがある。そのような奇妙さは会話にも認められる。そこでなされるのは、対話という日常的な相互行為形式をとりながら、それによって提示されるはずの整合的な意味世界の構築が拒否される非日常的コミュニケーションとでも言えるものである。このような特徴をもつ「歪んだ」会話を行なっているにもかかわらず、登場人物たちは互いにそれを指摘したり、とがめだてしたりせず、それが「当たり前」かのように対話を進行させる。ここにカフカ作品の奇妙さの一端を認めることができるだろう(西嶋, 2005)。

このように、カフカ作品の登場人物間の会話に見られるコミュニケーションは必ずしも円滑に進行しているとは限らない。たしかに円滑ではないが、しかし、外見上、コミュニケーション行動は成立しているように見える。コミュニケーションが成立しているように見えるということは、すなわち、前提として参加者間で形式的な協調関係が成立しているということである(丸井, 2006)。その協調を、円滑なコミュニケーションのための配慮行動にかかわるポライトネスという観点(Ide, 1988)からとらえるとすると、カフカ作品内のコミュニケーションにおいてはどのようなポライトネスの原理が働いているのかという疑問がわく。これは、奇妙な会話から類推されるように、日常的なコミュニケーションにおけるポライトネス原理と異なるのであろうか。異なるとすればどのように異なっているのであろうか。本研究は、カフカ作品内会話の協調関係を形式的なデータを用いて分析する試みである。

ポライトネスというのは、すでに触れたように、コミュニケーションにおける相手への配慮行動のことである。ポライトネスの研究分野にはさまざまな研究対象が関わる。本稿では、そのうちの一つであるコミュニケーション行動評価概念(Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens; evaluating concepts of communicative behavior: 以下、必要に応じてBKKVと略す)を分析の道具とする。コミュニケーション行動評価概念というのは、日本語なら「丁寧な」、「親しみをもって」、「尊大な」、ドイツ語なら *höflich*, *freundlich*, *überheblich*、英語では *polite*, *friendly*, *arrogant* といったように、自分ないし相手の言語行動を肯定的・否定的に評価する概念のことである。このような概念は、ある言語共同体のコミュニケーションのあり方の「通常性(当たり

前性)」に関わり、それを維持するための基準となるものである(丸井, 2006)。したがって、これらの概念を用いてカフカ作品を分析することにより、そこで描かれるコミュニケーション状況の背景となる通常性を明らかにできる可能性が生じる。

そこで、これらの概念を用いることによりカフカ作品に現われる登場人物間のコミュニケーションに焦点をあて、作品内で通用しているコミュニケーションの背景にある「通常性」を明らかにすることを試みる。まず、あるテキスト断片の中で行なわれているコミュニケーション行動の評価行為に注目し、それを分析する。それによって作品内でのコミュニケーション行動評価概念のカフカによる使用法がカフカ特有の奇妙なものではなく、むしろ日常的で一般的なものであることを確認する。つぎに、コミュニケーション行動評価概念の中で基本的で友好的および形式にのっとった協調を表わす評価概念である *freundlich* および *höflich* が長編三部作『失踪者 (アメリカ)』(*Der Verschollene*)、『訴訟 (審判)』(*Der Proceß*)、『城』(*Das Schloß*)においてどのような使用頻度と分布にあるのかを分析し、その対比によってそれぞれの作品内での登場人物間のコミュニケーションにおける協調関係の友好度と儀礼度の測定を試みる。そして、この協調関係が作品内容とどのような関係にあるのかを検証する。このような研究方向は、カフカ作品の会話の背景にある協調のあり方においてどのような行動が適切もしくは不適切と見なされているのかを明らかにし、それによって、カフカ作品内で通用しているコミュニケーション行動に関わる一般原則と日常的なそれとの異同を分析する足掛かりとなるものである。したがって、この種の研究は、カフカの作品におけるコミュニケーション行動の協調のあり方の一端を明らかにすることになる。

## 2 カフカ作品におけるコミュニケーションの評価行為の例

カフカ作品には奇妙な会話が含まれているということはこれまで多くの研究で指摘され、さまざまなレベルで議論されてきている。このような特徴をもつ「歪んだ」会話を行なっているにもかかわらず、作品内の登場人物たち

は互いにそれを指摘したりとがめだてたりせず、それが当たり前かのように平然と対話を進行させていく。すでに述べたように、ここにカフカ作品全体にかかわる奇妙さを認めることができる。しかしながら、カフカのテキスト断片の中には、コミュニケーション行動評価概念を用いて対話相手のコミュニケーション行動が不適切であることを指摘するものもある。そのようなテキストの一つは、交霊術という人間と霊との奇妙な会話からなる断片である。本稿では、まず、この一風変わった題材をもとにした会話断片を分析することで、その会話においてどのような行動が不適切であると見なされているのかを明らかにする。そして、カフカ作品に見られる奇妙な会話の構造の一部とコミュニケーション行動の評価の関係を論じたい<sup>1</sup>。

## 2.1. テキスト断片

ここで、作品自体を引用する。これはカフカの生前に出版されたものではなく、遺稿集にあるテキスト断片である<sup>2</sup>。このテキストをその内容に基づき、本稿では『交霊会話』(*Das spiritistische Gespräch*)と仮に名づけることにする<sup>3</sup>。説明の便宜上、各発話に通し番号をつけておく。下線による強調は論者による。なお、日本語訳をドイツ語原文の後に提示しておく。

- (1) In einer spiritistischen Sitzung meldete sich einmal ein neuer Geist und es wickelte sich mit ihm folgendes Gespräch ab:
- (2) Der Geist: Verzeihung.
- (3) Der Wortführer: Wer bist Du?
- (4) G. Verzeihung.
- (5) W. Was willst Du?

<sup>1</sup> 小品集『観察』(*Betrachtung*)に収められている『不幸であること』(*Unglücklichsein*)もそのような相手の行動の不適切さを指摘する場面が認められる。

<sup>2</sup> Franz Kafka: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Hrsg. von J. Schillemeit. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002, p. 19.

<sup>3</sup> 本テキストの詳細な分析は、小品『不幸であること』とともに別稿で扱う予定なので、本稿では深くは立ち入らない。

- (6) G. Fort.
- (7) W. Du bist doch erst gekommen.
- (8) G. Es ist ein Irrtum.
- (9) W. Nein es ist kein Irrtum. Du bist gekommen und bleibst.
- (10) G. Mir ist eben schlecht geworden.
- (11) W. Sehr?
- (12) G. Sehr.
- (13) W. Körperlich?
- (14) G. Körperlich?
- (15) W. Du antwortest mit Fragen, das ist ungehörig. Wir haben Mittel Dich zu strafen, antworte also lieber, denn dann werden wir Dich bald entlassen.
- (16) G. Bald?
- (17) W. Bald.
- (18) G. In einer Minute?
- (19) W. Benimm Dich nicht so kläglich. Wir werden Dich entlassen, wenn es uns

【試訳】

- (1) ある交霊術の集まりにかつて新人の霊がやって来て、以下のように  
霊との会話が始まった：
- (2) 霊： すみません。
- (3) 霊媒師： どなたで？
- (4) 霊： すみません。
- (5) 霊媒師： お望みは？
- (6) 霊： おさらばを。
- (7) 霊媒師： 今来たばかりですよ。
- (8) 霊： 何かの間違いなんです。
- (9) 霊媒師： 間違いではありません。来たばかりなので、ここに居るのです。
- (10) 霊： たった今、気分が悪くなりました。
- (11) 霊媒師： とても？

- (12) 霊： とてもです。
- (13) 霊媒師： 肉体的に？
- (14) 霊： 肉体的に、ですって？
- (15) 霊媒師： 疑問で答えていますね。それは無作法というものです。われわれにはあなたを罰する手段があります。答えたほうがいいですよ。というのも、そうすれば、あなたをすぐにも解放するからです。
- (16) 霊： すぐに？
- (17) 霊媒師： すぐに。
- (18) 霊： 一分後に？
- (19) 霊媒師： そんなに情けない態度をとらないで。解放しますよ、ただし

## 2.2. 評価概念 *ungehörig* の用法

上に引用したカフカのテキスト断片のなかに、対話相手のコミュニケーション行動が不適切であることを指摘する箇所がある。該当する部分を抜き出してみよう。

- (10) G. Mir ist eben schlecht geworden.
- (11) W. Sehr?
- (12) G. Sehr.
- (13) W. Körperlich?
- (14) G. Körperlich?
- (15) W. Du antwortest mit Fragen, das ist ungehörig. Wir haben Mittel Dich zu strafen, antworte also lieber, denn dann werden wir Dich bald entlassen.

下線を施した *ungehörig* (無作法な) に注目しよう。これは直前の *Du antwortest mit Fragen* (疑問で答えている) に対するコメントであり、したがって、メタレベルでの評価である。*ungehörig* はどのような意味なのだろうか。その辞書上の意味を *DUW* で調べてみよう：

*nicht den Regeln des Anstands, der guten Sitte entsprechend; die geltenden Umgangsformen verletzend: ein -es Benehmen; eine -e (freche, vorlaute) Antwort geben; sich u. aufführen (DUW, p. 1655)*

[試訳] 礼儀の規則や正当な習慣に従わない; 通用している交際形式に違反する: *ungehörig* な振る舞い; *ungehörig* な (生意気な、出しゃばった) 答えをする; *ungehörig* に振る舞う。

評価概念 *ungehörig* の意味内容は、上記の辞書説明を見る限り、礼儀の規則や決まりごとにしたがっていない、通用している付き合いの形式に違反していることのようなのだ。たしかに、この表現 *ungehörig* によって評価される行動が具体的にどのような行為なのかは、この説明自体からはわからない。しかし、当該場面では何らかの規範に対して不適切だということを意味していることはわかる。では、上記のカフカのテキストでは、具体的にどのような行為がこのように否定的に評価されているのだろうか。

この評価概念が出現する前のやり取りを見ると、霊 (*Geist* (以下、G)) が気分が悪化を訴え(10)、それに応じて霊媒者 (*Wortführer* (以下、W)) がその程度を確認するために *Sehr?* と尋ねる(11)。それに対して鸚鵡返し表現ではあるが、おそらく下降調のイントネーションの *Sehr* を用いて答える(12)。つぎに同じパターンで *Körperlich?* と質問がなされる(13)。それに対しては、その前のやり取りと同様に鸚鵡返しに同じ表現 *Körperlich* で応じるが(14)、今回は疑問符があるので上昇イントネーションの問い返しという形式をとる。なぜこのような反応になったかという点、Gは霊 (*Geist*) なのでその性質上、肉体 (*Körper*) を持たない。したがって、*Körperlich?* (肉体的に?) という疑問はその対応物が存在しないため、意味をなさない。そこで相手の真意を問い返すことになったのだと推測される。そのような確認のための問い返しに対して、問いに対して問いで答えたという理由で *ungehörig* と否定的に評価されたわけである。そして、それ以降の発話では、相手への制裁へと話題

が移ることになる。なお、同一表現の繰り返しと話題の移行（ズラシ）は、カフカ作品では典型的な奇妙な会話を構成することがある（cf. Neumann, 1966; 西嶋, 2005）。

問いに対して問いで応じる答え方については、一般的には好ましくないと考えられているようだ。それは、相手からの問いに疑義を唱える、もしくはその正当性を疑うことになりうるからである。このテキスト断片では、質問した人物は、その立場上、上位に位置づけられるので、なおさらである。このテキストでの登場人物間の関係が非対称性を反映(前提)していることは、それに続く制裁に関するつぎの発言からも明らかである(15)（下線による強調は論者による）：

Wir haben Mittel Dich zu strafen, antworte also lieber, denn dann werden wir Dich bald entlassen.

すなわち、「罰する（strafen）」「解放する（entlassen）」といった表現が使えるためには、その使用者はそのような権限ないし支配力を他者に対して行使できる地位にいる必要があるという意味で、立場の差があることがわかる。

### 2.3. *Benimm Dich nicht so kläglich*

後続する会話を見てみよう。

(16) G. Bald?

(17) W. Bald.

(18) G. In einer Minute?

(19) W. Benimm Dich nicht so kläglich. Wir werden Dich entlassen, wenn es uns

この会話においても、(11)(12)および(13)(14)の連鎖と同様に、同一表現 *Bald* を用いた問い(16)と答え(17)の連鎖が認められる。

(19)の *Benimm Dich nicht so kläglich*. の下線部 *Benimm Dich* の表現の不定形 *sich*



*benehmen* は、どのような意味だろうか。上と同様に *DUW* の説明を引用する。

*sich (in einer bestimmten Weise) verhalten, betragen: sich gut, unmöglich (sehr schlecht) wie ein Idiot b.; sich [un]höflich gegen jmdn./jmdm. gegenüber b.; sich nicht b. können (schlechte Umgangsformen haben) (DUW, p. 260)*

(試訳) (ある特定の様態で) 振る舞う、態度をとる：上手に、阿呆のようにとんでもなく（とてもひどく）*benehmen*：誰かに対して丁寧に [無礼に] *benehmen*；*sich nicht benehmen können*（行儀悪い）

「ある特定の様態で振る舞う」ことと説明されている。したがって、*Benimm Dich nicht so kläglich* は、「そんなに情けない振る舞いをするな」といった意味であろう。強者が弱者に対して使用する表現とみなされる。なお、*Benimm Dich* は、様態に関する表現がなく、単独で使用された場合、一般に「礼儀にしたがう」ことを要求する。多くの場合、*Benimm dich anständig*（おとなしくしていなさい）といった意味で子どもに対して使われる。この命令表現の使用自体が、たとえば、親子といったような地位の差を前提にしている。

## 2.4. 問題設定

上節では作品内会話における評価行為に関する簡単な分析を行なった。それによって示唆されるのは、当該作品内のコミュニケーションで通用している「通常性」である。この会話テキストでは、表層上のテーマの移行（ズラシ）が行なわれているが、それはたしかに奇妙に思える（cf. 西嶋, 2001）。しかしながら、評価行為を通してコミュニケーションの背景に想定される「通常性」は意外にも標準的であった。なぜなら、上記のやり取りにおいて質問に対して質問で答えることの「無礼」を指摘し、また、弱弱しく惨めな態度は協調的なコミュニケーションについて好ましくないという考え方（規範）が前提となっていることが明らかにされたからである。これらは、日常的な規範と何ら変わるものではない。この適切さが、あまりにも「当り前」過ぎ

て、カフカ作品のもつ奇妙さを逆に浮き彫りにしているのかもしれない。このように、適切なコミュニケーションがなされているという事態が、他のカフカ作品にも同様に認められるのかどうかは、実際に他の作品を分析することによって検証することができる。

上記のような評価語彙を用いた会話の分析は、他のすべての作品（日記も含めて）に適用可能であろう。しかし、作品によってコミュニケーション行動の評価の扱いは、そこに提示される人間関係にかかわり、したがって多様性がありうる。その多様性は、作品の理解に何らかの影響を与える可能性がある。手始めに、そのような対人行動が比較的問題となる作品を例に分析するのが便利である。具体的には、評価行為によって、当該の人物間の諸関係が引き出せ、多様な人間関係が提示されると期待される長編を利用する。カフカの長編三部作『失踪者（アメリカ）』『訴訟（審判）』『城』を利用して、その作品内で使用されるある基本的な評価概念の出現率と分布に関して比較を行なう。それによって、その出現様態の差と作品内容との関連を明らかにしたい。

### 3 方法

#### 3.1. 資料

ドイツ語のコミュニケーション行動評価概念の基本的な代表例は友好的な関係を前提とする *freundlich* と *höflich* であろう (Nishijima, 2000)。これらは、ドイツ語によるコミュニケーションの基本とされるので、これらが使用されているなら、そこでは比較的正常的なコミュニケーション、すなわち、友好的で儀礼形式にのっとったコミュニケーション行動がなされていると判断できる。それをカフカと同時代に出版された辞書 (Eberhard, 1910) の情報で確認してみよう：

*Eberhard Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache* (1910)

Freundlich [ist jeder, der sein Wohlwollen gegen andere äußert, ] [Ein

guter Fürst ist im Verkehr mit seinesgleichen freundlich,]  
Im Umgang mit anderen aufmerksam u. entgegenkommend,  
liebenswert (p. 576)

(試訳) *freundlich* なのは、他者に対して自分の好意を表明する人。善良な君主は同等の人物との付き合いにおいて *freundlich* である。

他者との交流において気遣いがあり、親切に、いたわりのある

Höflich [ist, wer sich bemüht, seine Achtung und Ehrerbietung gegen die Personen der Gesellschaft durch Handlungen und Reden auszudrücken]

(in seinem Verhalten anderen Menschen gegenüber) aufmerksam u. rücksichtsvoll, so, wie es die Umgangsformen gebieten (p. 793)

(試訳) *höflich* なのは、行動と発話を通じて同じ社会の構成員に対して配慮と敬意を表明しようと努める人である。

(他者に対する振る舞いにおいて) 注意深くかつ配慮があること、行儀が要求しているようなこと)

Höflichkeit: Wer anderen soviel Aufmerksamkeit und Achtung erweist, als sie nach ihren Verhältnissen und den eingeführten Sitten verlangen können, dem schreibt man *Höflichkeit* zu. (p. 793)

他者が諸関連や採用されているしきたりにしたがって欲することができる程度の配慮と敬意をその他者に対して示す人物は *Höflichkeit* と特徴づけられる。

評価概念 *freundlich* と *höflich* は、両者とも、適切な人間関係の際の配慮を示しているが、違いもある。すなわち、*freundlich* は気遣い、親切、いたわりなどの好意と関わるが、*höflich* は行儀作法や相手への敬意と結びついている。

したがって、これらの表現の使用頻度が高いということは、それぞれ、好意的で儀礼にのっとったコミュニケーションが行なわれていると推測することができるわけだ。

そこで、これらの概念を表わす語とその派生形（反意語 *unhöflich* と *unfreundlich* およびそれらの名詞形 *Höflichkeit* と *Freundlichkeit* それに *Unhöflichkeit* と *Unfreundlichkeit*）を利用して、その出現数と出現場面を比較してみる。その際、丁寧な依頼を表わす慣用表現に含まれる用例、たとえば „Wären Sie so freundlich und würden Sie dem Portier telefonieren, er möchte die Leute zu mir schicken oder mich holen lassen.“ (*Der Verschollene*, p. 174) のような慣用的な例は除外する。評価行為が行なわれていないからである。

### 3.2. 方法

これらの評価概念の使用箇所を三作品のテキストで調査し、その使用頻度と分布によってコミュニケーションの友好度と儀礼度を評価する。この評価に基づいて、それぞれの概念の使用量の違いにより、当該テキストが対人関係において何を重視しているのかを予測する。テキストは、批判版を用いた<sup>4</sup>。

## 4 結果と考察

### 4.1. 『失踪者(アメリカ)』(*Der Verschollene*)

『失踪者』における *freundlich* および *höflich* 関連語の出現総数はそれぞれ 33 と 15 である。作品全体の中での出現頻度を引き出すために、総ページ数を母数にして百分率で表わすことにした。その結果はつぎの表 1 のとおりである。

<sup>4</sup> Franz Kafka: *Der Verschollene*. Hrsg. von J. Schillemeit. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

Franz Kafka: *Der Proceß*. Hrsg. von M. Pasley. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

Franz Kafka: *Das Schloß*. Hrsg. von M. Pasley. Frankfurt/M.: Fischer Taschenbuch Verlag, 2002.

表1 『失踪者』の *freundlich* と *höflich* 関連語の出現場面と回数

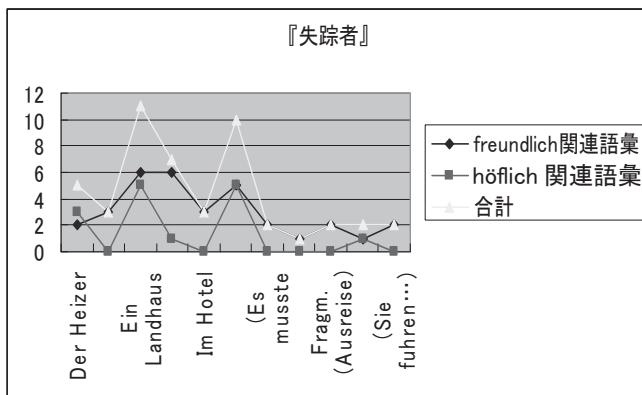
章	<i>Freundlich</i> 関連語		<i>Höflich</i> 関連語		合計
<i>Der Heizer</i>	2	freundlich x1 freundlich x1	3	höflich x2 Höflichkeit x1	5
<i>Der Onkel</i>	3	freundlich x3	0	-	3
<i>Ein Landhaus</i>	6	freundlich x4 (RF <sup>5</sup> x1) freundlich x3	5	höflich x2 unhöflich x1 Höflichkeit x1 Höflichkeitsformel x1	11
<i>Der Marsch</i>	6	freundlich x5 Freundlichkeit x1	1	Höflichkeit x1	7
<i>Im Hotel</i>	3	Freundlich x4 (RF x1)	0	-	3
<i>Der Fall Robinson</i>	5	freundlich x3 Freundlichkeit x2	5	Höflichkeit x2 Unhöflichkeit x2 höflich x1	10
<i>(Es mußte wohl)</i>	2	freundlich x2	0	-	2
<i>(Auf, Auf)</i>	1	freundlich x1	0	-	1
<i>Fragmente (Ausreise)</i>	2	freundlich x1 freundlichst x1	0	-	2
<i>(Karl sah ...)</i>	1	freundlich x1	1	Höflichkeit x1	2
<i>(Sie führen ...)</i>	2	freundlich x1 Freundlichkeit x1	0	-	2
<b>総数と出現率</b>	<b>33</b>	<b>7.88% (33 / 419)</b>	<b>15</b>	<b>3.58% (15 / 419)</b>	<b>SD*</b>
<b>総合</b>	<b>48</b>	<b>11.46% (48 / 419)</b>			

\**freundlich* と *höflich* の出現には有意差あり ( $p < .01$ )。

<sup>5</sup> Routineformular (慣用表現) の略。以下同様。

両評価概念の使用は有意差が認められている ( $p<.01$ )。明らかに *freundlich* が多く使用されていることがわかる。

また、各章ごとの使用分布を調査した結果は、つぎのグラフ 1 にまとめておいた。グラフ 1 をみると、*freundlich* は全体にわたって使用され、とりわけ前半に多用されている。ところが、*höflich* は使用される場面が *Der Heizer* (火夫)、*Ein Landhaus* (ニューヨーク近郊の別荘)、*Der Fall Robinson* (ロビンソン事件) の 3 章に限られる。つまり、*freundlich* が全体にわたって使用されていることから、好意的な関係がテキスト全体を通して貫かれていると予測される。他方、*höflich* の使用が上記 3 章に限定されているので、そこではより儀礼的な事態が生じていると推測できる。



グラフ 1 『失踪者』の分布

#### 4.2. 『訴訟(審判)』

『訴訟 (Der Proceß)』における *freundlich* および *höflich* 関連語の出現総数はそれぞれ 25 と 10 である。前節の『失踪者(アメリカ)』と比べると、*freundlich* については 7 少なく、4 分の 3 にあたる。他方、*höflich* 関連語は 5 少なく、3 分の 2 に相当する。全体の中での出現頻度を引き出すために、総ページ数を母数にして百分率で表わすとつぎの表 2 のようになる：

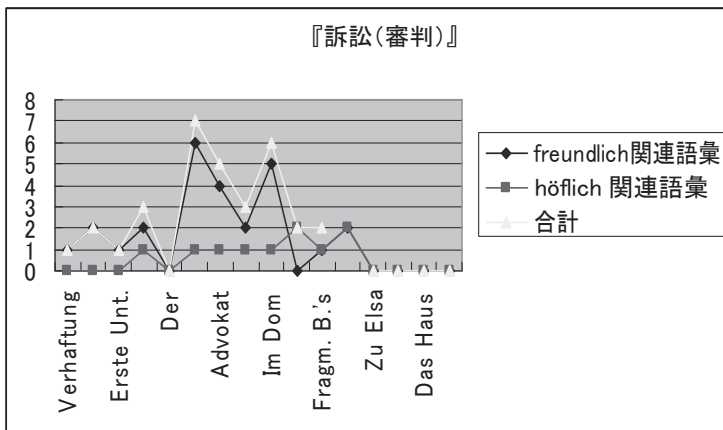
表 2 『訴訟（審判）』の *freundlich* および *höflich* 関連語の出現総数と頻度

	<i>freundlich</i> 関連語		<i>höflich</i> 関連語		合計
<i>Verhaftung</i>	1	<i>freundlich</i> x1	0	-	1
<i>Gespräch mit Frau Grubach</i>	2	<i>freundlich</i> x2	0	-	2
<i>Erste Untersuchung</i>	1	<i>freundlich</i> x1	0	-	1
<i>Im leeren Saal</i>	2	<i>freundlich</i> x1 Freundlichkeit x2 (RF x1)	1	<i>höflich</i> x1	3
<i>Der Prügler</i>	0	-	0	-	0
<i>Der Onkel</i>	6	<i>freundlich</i> x6	1	<i>höflich</i> x1	7
<i>Advokat</i>	4	<i>freundlich</i> x4	1	unfreundlich x1	5
<i>Kaufmann Block</i>	2	<i>freundlich</i> x2	1	Unhöflichkeit x1	3
<i>Im Dom</i>	5	<i>freundlich</i> x5	1	unhöflich x1	6
<i>Ende</i>	0	-	2	Höflichkeit x2	2
<i>Fragmente B.'s Freundin</i>	1	<i>freundlich</i> x1	1	Höflichkeit x1	2
<i>Saatsanwalt</i>	2	<i>freundlich</i> x2	2	<i>höflich</i> x1 Höflichkeit x1	4
<i>Zu Elsa</i>	0	-	0	-	0
<i>Kampf mit dem Direktor</i>	0	-	0	-	0
<i>Das Haus</i>	0	-	0	-	0
<i>Fahrt zu Mutter</i>	0	-	0	-	0
<b>総数と出現率</b>	<b>25</b>	<b>7.04% (25 / 355)</b>	<b>10</b>	<b>2.82% (10 / 355)</b>	<b>SD*</b>
<b>総合</b>	<b>35</b>	<b>9.86% (35 / 355)</b>			

\**freundlich* と *höflich* の出現には有意差あり ( $p < .01$ )。

両評価概念の使用は有意差が認められている ( $p<.01$ )。明らかに *freundlich* が多く使用されていることがわかる。

また、各章ごとの使用分布を見ると、つぎのグラフ2のようになる。これを見る限り、全体的に使用が中央部に集中していることがわかる。とくに終わりに近い後半部は使用がほとんど認められない。*höflich* の使用は、極めて少ないが、中央部に見られる。他方、*freundlich* の使用は2つの山がある。*Der Onkel* (叔父レニ) と *Im Dom* (大聖堂にて) の2章である。ここでは、好意的な関係が描写されていると推測できる。おそらく中央部分のコミュニケーションでは好意的かつ儀礼を重んじた形式的な協調関係が見られるのであろう。



グラフ2 『訴訟 (審判)』の分布

#### 4.3. 『城』

『城』における *freundlich* および *höflich* 関連語の出現総数はそれぞれ 24 と 10 である。『失踪者』と比べると、*freundlich* については 1 回少ないだけでほぼ同数であるが、*höflich* 関連語は 3 分の 1 少ない。また、『訴訟 (審判)』と比べると、*freundlich* については 1 回少ないだけでほぼ同数であり、*höflich* 関連語は同数である。ただし、総ページ数が他の 2 作品とかなり異なり、分量



が最多である。そこで、全体の中での出現頻度を引き出すために、総ページ数を母数にして百分率で表わすことわざの表3のようになる。

表3 『城』の *freundlich* および *höflich* 関連語の出現総数と頻度

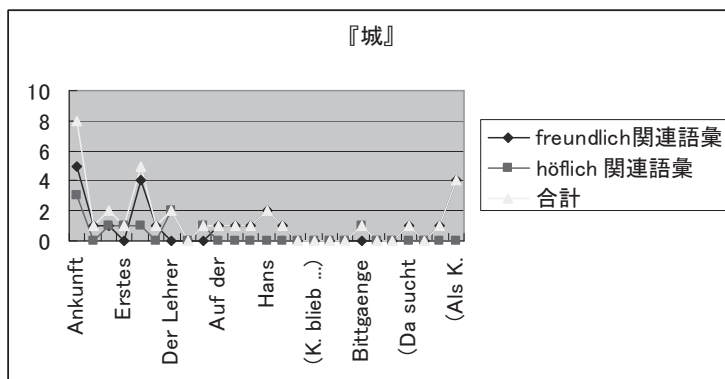
	<i>freundlich</i> 関連語		<i>höflich</i> 関連語集		合計
<i>Ankunft</i>	5	freundlich x1 unfreundlich x1 Freundlichkeit x1 Gastfreundlichkeit x2	3	höflich x1 Unhöflichkeit x2	8
<i>Barnabas</i>	1	Freundlichkeit x1	0	-	1
<i>Frieda</i>	1	freundlich x1	1	höflich x1	2
<i>Erstes Gespräch mit der Wirtin</i>	0	-	1	Höflichkeit x1	1
<i>Beim Vorsteher</i>	4	freundlich x4	1	höflich x1	5
<i>Zweites Gespräch mit der Wirtin</i>	1	freundlich x1	0	-	1
<i>Der Lehrer</i>	0	-	2	unhöflich x2	2
<i>Das Warten auf Klamm</i>	0	-	0	-	0
<i>Kampf gegen das Verhör</i>	0	-	1	höflich x1	1
<i>Auf der Straße</i>	1	freundlich x1	0	-	1
<i>In der Schule</i>	1	freundlich x1	0	-	1
<i>Die Gehilfen</i>	1	allzufreundlich x1	0	-	1
<i>Hans</i>	2	freundlich x1 unfreundlich x1	0	-	2
<i>Friedas Vorwurf</i>	1	Freundlichkeit x1	0	-	1
<i>Bei Amalia</i>	0	-	0	-	0

(K. blieb ...)	0	-	0	-	0
Amalias Geheimnis	0	-	0	-	0
Amalias Strafe	0	-	0	-	0
Bittgänge	0	-	1	höflich x1	1
Olgas Pläne	0	-	0	-	0
(Nur war es ...)	0	-	0	-	0
(Da sucht K. ....)	1	freundlich x1	0	-	1
(Erst jetzt )	0	-	0	-	0
(Wahrscheinlich)	1	Freundlichkeit x1	0	-	1
(Als K. Aufwacht)	4	freundlich x2 Freundlichkeit x2	0	-	4
<b>総数と出現率</b>	<b>24</b>	<b>4.85% (24 / 495)</b>	<b>10</b>	<b>2.02% (10 / 495)</b>	<b>SD*</b>
<b>総合</b>	<b>34</b>	<b>6.87% (34 / 495)</b>			

\**freundlich* と *höflich* の出現には有意差あり ( $p < .05$ )。

両評価概念の使用は有意差が認められている ( $p < .05$ )。明らかに *freundlich* が多く使用されていることがわかる。

また、各章ごとの使用分布を見ると、つぎのグラフ3のようになる。これによると、*höflich* は最初から半ばにかけて 1、2 例使用されるが、それ以降はほとんど使われていないことがわかる。形式的な関係ないし儀礼はあまり問題にされていないように見える。他方、*freundlich* は前半と中盤、そして末尾でその使用が顕著に見られる。前半部では、*Ankunft* (到着) と *Beim Vorsteher* (村長宅にて) に山が認められる。そこでは、好意的な関係が描かれていると予測できる。



グラフ 3 『城』の分布

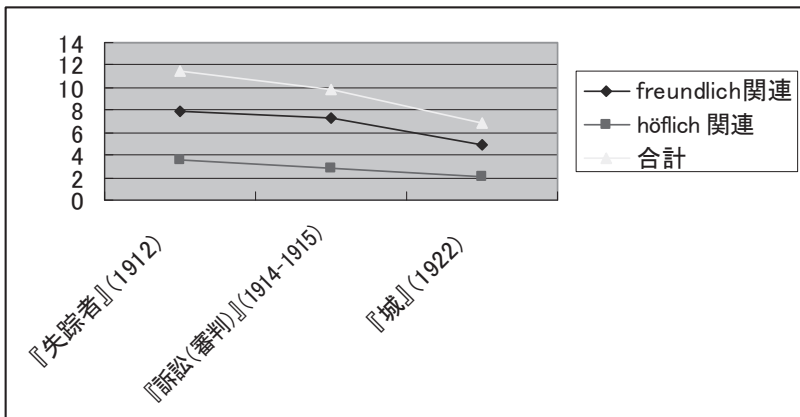
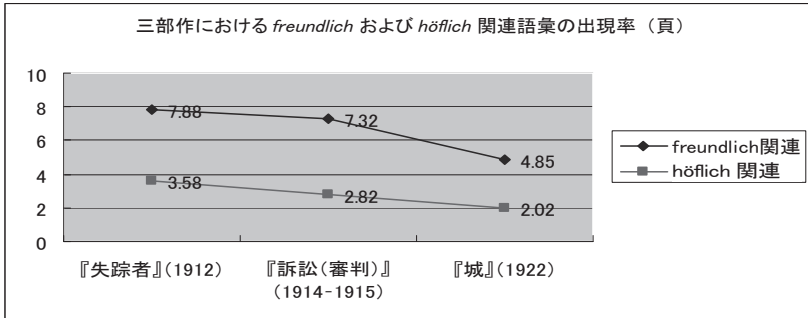
#### 4.4. 出現分布

表 4 カフカの長編三部作の BKKV 使用率 (頁) の比較(%)

作品名	<i>freundlich</i> 関連	<i>höflich</i> 関連	総合
『失踪者 (アメリカ)』	7.88	3.58	11.46*
『訴訟 (審判)』	7.04	2.82	9.86
『城』	4.85	2.02	6.87*

『失踪者』と『城』の総合出現率には有意差あり ( $p < .05$ )。

すでに見たとおり、この三作品については、*freundlich* と *höflich* の使用には有意差が認められている。前者のほうが全作品を通して多く使用されている。したがって、基調は *höflich* よりも *freundlich* にあるということである。さて、表 4 のこの数値から見て取れるように、代表的な *höflich* と *freundlich*、そしてその派生形 (反意語およびその名詞形) の使用率の差は、両語とも『失踪者』『訴訟 (審判)』『城』の順で高いことがわかる。とくに、『失踪者』と『城』に関して、両概念の合計は有意に異なる ( $p < .05$ )。グラフで表わすつぎのようになる。



グラフ 4 三部作における *freundlich* および *höflich* 関連語彙の出現率（頁）

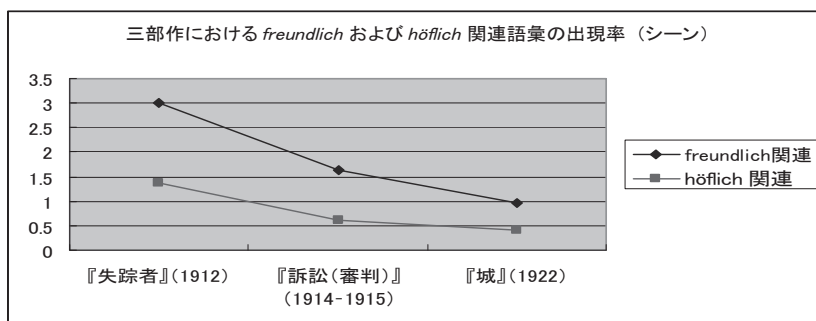
*freundlich* の使用については、『失踪者』と『訴訟（審判）』はほぼ同程度であるが、『城』はその半数程度である。どの作品も *höflich* の使用頻度は高くないが、その量の分布も同様に低い。

今度は、場面ごとの平均出現率を見てみよう。

表 5 カフカの長編三部作の BKKV 使用率 (シーン) の比較(%)

	<i>freundlich</i> 関連	<i>höflich</i> 関連
『失踪者( <i>Der Verschollene</i> )』	3.00	1.36
『審判( <i>Der Proceß</i> )』	1.63	0.63
『城( <i>Das Schloß</i> )』	0.96	0.40

この数値から見て取れるように、場面ごとの使用率に関しても、代表的な *höflich* と *freundlich*、そしてその派生形 (反意語およびその名詞形) の使用率は、両表現とも『失踪者』『訴訟 (審判)』『城』の順で高いことがわかる。グラフで表わすとつぎのようになる。

グラフ 5 三部作における *freundlich* および *höflich* 関連語彙の出現率 (シーン)

これらのグラフから読み取れるのは、つぎの点である。『失踪者』で両概念とも高い値を示している。これは、描かれる人間関係として『失踪者』が一番好意的かつ行儀作法を重んじた協調が背景にありそうだということだ。通常の日常的世界に近い人間関係が描かれていると理解することができる。ところが、『城』では両概念ともその数値がかなり低い。両概念とも、『失踪者』の約半分である。これはどういうことを示唆しているのか。おそらく、人間関係が好意的に協力的に期待通りに進行していない状況にあることが推測される。親切や好意的な関係を表わす *freundlich* が低いからである。また、

儀礼的に相手とうまくやっっていこうという態度も *höflich* の使用頻度の低さからほとんど見受けられない。『訴訟（審判）』は他の2作品の中間に位置する。しかし、傾向としては、『失踪者』に近いと言えそうである。

## 5 おわりに

これまでの議論から長編三部作に関して *freundlich* と *höflich* の使用頻度と分布に形式的な傾向差があることがわかった。使用頻度が高い順にならべれば、『失踪者（アメリカ）』『訴訟（審判）』『城』になる。この変化から、これらの作品は、時代が下るごとに人間関係の描写に他者への配慮といった「人間的な」要素が希薄になっていると推測できる。この三作品の *freundlich* と *höflich* の使用頻度は、Krusche(1974)の調査によれば会話量の多さと逆の対応関係にある。すなわち、会話の占める割合はそれぞれ 50～55%、60～65%、70～75%だという(p. 52)。会話量が増加すると、それに伴い、好意的かつ儀礼的な行為へのメタレベルの言及が減少する傾向にあることがわかる。また、西嶋・ライネルト(1992)の調査によると、読みやすさの順もこの順だということ。ということは、*freundlich* と *höflich* で代表される好意的かつ儀礼に基づく協調関係が多く認められれば、その分だけ日常世界との関連が高い可能性があるので、理解がしやすく、逆に少なければ理解が難しくなるという傾向があると言えそうである。もしこの推測が妥当ならば、コミュニケーション行動評価概念によって作品内で描写されるコミュニケーション行動の背景を探ることで、カフカ作品の理解を深めていく可能性が拓けることになる。他の評価概念も含めた詳細な調査は今後の課題とする。

## 文献

- *Deutsches Universalwörterbuch* (DUW) . 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Hrsg. von der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, u. Zürich: Dudenverlag.
- Eberhard, J. A. (1910). *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*. Durchgängig umgearbeitet, vermehrt und verbessert von Prof. Dr. Otto Lyon.

- Leipzig: Th. Grieben's Verlag (L. Fernau), 1910. [復刻版 三修社 1983]
- Hermanns, F. (1993). „Mit freundlichen Grüßen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend.“ W. P. Klein & I. Paul (Hgg.): *Sprachliche Aufmerksamkeit Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart*. Heidelberg. 81-85.
  - Krusche, D. (1974). *Kafka und Kafka-Deutung*. München: C. Hanser.
  - Ide, S. (1988). Introduction. *Multilingua*. 7(4), 371-374.
  - 丸井 一郎. (2006). 『相互行為の理論のために 「当たり前」の分析』. 三元社.
  - Nishijima, Y. (2000). „*Freundlich und höflich*: Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens.“ 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第4号, 185-207.
  - 西嶋義憲. (2001). 「カフカのテキスト *Kinder auf der Landstrasse* における対話の分析——繰り返しの技法——」. 金沢大学外国語教育研究センター『言語文化論叢』第5号, 175-186.
  - 西嶋 義憲. (2005). 『カフカと通常性 —作品内会話における日常的言語相互行為の「歪み」—』金沢大学経済学部研究叢書.
  - 西嶋義憲&ルードルフ・ライネルト. (1992). 「発話行為理論の文学研究への応用の試み——Kafkaの作品を例にして——」. 日本独文学会中国四国支部『ドイツ文学論集』第25号, 83-90.